

古典文法 助動詞② 「つ、ぬ」

文法的意味

つ・ぬ	「完了」	「…た、てしまう」
「強意」	「きつと」	
「並列」	「…たり…たり」	

「つ・ぬ」の違い

つ ≡ 「人為的・意思的」な動詞につく

【例】 秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。
(秋田は、なよ竹のかぐや姫と名付けた) 〈竹取〉

ぬ ≡ 「自然的・無意識的」な動詞につく

【例】 雨いささかに降りて止みぬ。
(雨が少々降って止んだ) 〈土佐〉

強意の「つ・ぬ」

「つ・ぬ」＋「推量」 「の助動詞」 ↓ 「つ・ぬ」は「強意」

てむ、なむ、つべし、ぬべし、つらむ、ぬらむ、てまし、なまし

【練習1】 傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「つ、ぬ」を文法的に説明せよ。

(例文) 風波やまねば

(口語訳) 止まないいで (文法的説明) 打消の助動詞「ず」の已然形。

1 天気てけの事こと、楫取りかぢとの心こころに任まかせつ。

天気てけの事ことは、船頭かぢとの考かんがえに――。
―。 〈土佐〉

2 雀すずめの子こを犬君いぬぎが逃にがしつる。

雀すずめの子こを犬君いぬぎが――。 〈源氏〉

3 「我物われもの握にぎりたり。今下ろいまおしてよ。

(高い所に上った中納言が)「私は目当ての物を捕まえたぞ。ではもう――。 〈竹取〉

4 格子^{かうし}どもも人^{ひと}は無^なくして開^あきぬ。

5 「潮満^{しほみ}ちぬ。風^{かぜ}も吹きぬべし。」と騒^{さわ}げば、

6 用^{よう}有りて行^いきたりとも、其^その事^{こと}果^はてな^とば疾^とく帰^{かへ}るべし。
事用事 ば 順接仮定条件の接続助詞。もし—ならば

7 日^ひの暮^くれぬ^{すべ}れば、滑^{すべ}り出^いで給^{たま}ひぬ。
ば 順接確定条件の接続助詞。—ので

8 元^{もと}の御^ごかたちと成^なり給^{たま}ひね。其^それを見^みてだに帰^{かへ}りな
む。」と仰^{おほ}せらるれば、かぐや姫^{ひめ}元^{もと}のかたち^なに成^なりぬ。
かたち 姿 給ふ 尊敬の補助動詞。お—にさる—なさる

9 世^よの中^{なか}に見^みえぬ皮衣^{かはぎぬ}の樣^{さま}なれば、此^これをと思^{おも}ひ給^{たま}ひぬ。
給ふ 尊敬の補助動詞。—なさる

10 我^{われ}は此^この頃^{ごろ}わろきぞかし、盛^{さか}りに成^ならば、容^{かたち}貌^もも限^{かぎ}
り無^なく良^よく、髪^{かみ}もいみじく長^{なが}くなりなむ。
いみじく とても む 推量の助動詞「む」の終止形。—だろう

11 「何^{なに}をか奉^{たてまつ}らむ。まめまめしき物^{もの}は、正^{まさ}無^なかりなむ。
正無し 良くない む 推量の助動詞「む」の終止形。—だろう

格子戸も人はいないままで——。
〈竹取〉

「潮が——。風もきつと吹くだろう。」と騒ぐので〈土佐〉

たとえ用事があつて訪ねたとしても、その用事が——早く帰るのがよい。〈徒然〉170段

日が——、皇子はこつそり退出なさつた。〈竹取〉

どうか元の姿に——。それを見て私は帰ることにしよう。」と帝がおっしゃられたので、かぐや姫は元の姿に——。〈竹取〉

世の中で見たことの無い皮衣の様子であるので、これが本物だと——。〈竹取〉

私は今は器量が良くないよ。でも年ごろになったら、顔立ちもこの上なく美しく、——。〈更級〉

「あなたに何を差し上げようか。実用性だけの物では、——。〈更級〉

12 「何^{なに}にても読み候^{よみまう}ひなん。」

候ふ丁寧の補助動詞。――ます む意志の助動詞「む」の終止形。
――しよう

13 この事^{こと}かの事^{こと}怠^{おこた}らず成^{じやう}じてむと、

成ずなしとげる む意志の助動詞「む」の終止形。――しよう

14 「気疎^{けうと}くも成^なりにける所^{ところ}かな。然^さりとも、鬼^{おに}なども、

我^{われ}をば見許^{みゆる}してむ。」と宣^{のたま}ふ。

ば係助詞「は」の濁音化。特に訳さない 見許す 見逃す む
推量の助動詞「む」の終止形。――だろう

15 羽^{はね}をふためかして惑^{まど}ふ程^{ほど}に、鳥^{からす}の翔^{かけ}りありきければ、
「あな心憂^{こころう}。鳥取^{からす}りてん。」とて、此^この女急^{おんないそ}ぎ
取^とりて、 ん推量の助動詞「む」の終止形。――だろう

16 「黒^{くろ}き雲^{くも}にはかに出^いで来^きぬ。風吹^{かぜふ}きぬべし。

べし推量の助動詞「べし」の終止形。――だろう

17 我^{われ}は皇子^{みこ}に負^まけぬべしと胸^{むね}うちつぶれて思^{おも}ひけり。

べし推量の助動詞「べし」の連用形。――だろう

18 女児^{をんなご}の為^{ため}には、親^{おや}幼^{をさな}く成^なりぬべし。

べし推量の助動詞「べし」の連用形。――だろう

（お前は何でも読めるのかと問われて）「何であつても――。」
〈宇治拾遺〉

このことやあのことをなまけずに――と〈徒然〉

「気味悪く成り果てた屋敷だなあ。とはいえ、鬼なども私を――。」とおっしゃる。〈源氏〉

腰骨を折られた雀が羽をばたつかせて慌てていると、カラスがその上を飛び回ったので、「ああ心配だ。カラスが雀を――。」と思つて、この女が急いで雀を捕まえて〈宇治拾遺〉

黒い雲が急に出てきた。風が――。
〈土佐〉

私は皇子に――と、胸もつぶれる思いでいた。〈竹取〉

娘のためであれば、親も分別を失い――。
〈土佐〉

19 舟子どもは腹鼓を打ちて、海をさへ驚かして、波立
てつべし。 べし 推量の助動詞「べし」の連用形。―しそうだ

20 冬は、雪をあはれぶ。積もり消ゆる様、罪障に譬へ
つべし。

罪障 訳はそのまま。仏教語で、往生の妨げとなる罪・行い
べし 可能の助動詞「べし」の終止形。―できるだろう

21 六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし。
厭離 嫌い避ける・捨て去る べし 可能の助動詞「べし」の終止
形。―できるだろう

22 人は静まりぬらん。
静まる 寝静まる らん 現在推量の助動詞「らむ」の終止形。―
ているだろう

23 さて月頃経て、今は良く成りぬらんとて見れば、良
く成りにけり。
らん 現在推量の助動詞「らむ」の終止形。―ているだろう

24 内裏を思し遣りて、「名対面は過ぎぬらむ。滝口の
宿直奏し、今こそ。」と、推し量り給ふは、
らん 現在推量の助動詞「らむ」の終止形。―ているだろう

船員たちは満腹で腹鼓を打ち、
海までもびつくりさせて、〈土
佐〉

冬は、雪をしみじみと鑑賞する。
雪が積もって消える様子は、―
。〈方丈記〉

人間はこの世のあらゆる物への
欲望が多いとはいっても、それ
ら欲望はすべて、努力すれば―
。〈徒然〉

家の中の者は、もう―。〈徒然〉

そうして数ヶ月たって、今なら
―と、思つてひょうたんをみる
と、適度によく乾燥していた。
〈宇治拾遺〉

（外泊中の光源氏が）内裏に思い
を馳せて、「名対面（夜の点呼）の
時間は―。警備の滝口の武士
たちの点呼がちやうど今ごろだ
ろう。」と推測なさるのは、〈源
氏・夕顔〉

25 「其れを取りて後は、我が物とこそ思ひつらめ。

らめ 現在推量の助動詞「らむ」の已然形。―ているだろう

26 大音声 上げて名乗りけるは、「日頃は音にも聞きつ

らん、今は目にも見給へ。木曾殿の御乳母子今井四郎兼平、生年三十三に罷り成る。

音 噂 らん 現在推量の助動詞「らむ」の已然形。―ているだろう・ただろう。現在につながる近い過去にも用いる

27 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

らむ 現在の原因推量の助動詞「らむ」の已然形。(うだから・という理由で)―なのだろう。

28 さて、斯許りの詩を作りたらましかば、名の上がらむ事も勝りなまし。口惜しかりける業かな。

まし 反実仮想の助動詞「まし」の終止形。―だっただろうに

29 今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

と 比喻の格助詞。―のように ぞ 強意の係助詞。特に訳さない まし 反実仮想の助動詞「まし」の終止形。―ただろうに

30 花の如世の常ならば過ぐして昔は又も帰り来な

まし 又 再び・もう一度 まし 反実仮想の助動詞「まし」の終止形。―だろうに

それを奪った後では、もう自分の物だと――。〈十訓〉

大声を上げて名乗ったことには、「常日頃から、私のことを噂にも――、さあ今はその目で見たまえ。私は木曾殿の乳母子である今井四郎兼平、当年三三歳に成り申した。〈平家〉

恋しい男性を思いながら寝たので、夢の中でその人が――。夢だと分かっていたら覚めずにしたのになあ。〈古今・恋〉

そうして(漢詩の舟に乗って)、それ程の詩をもし作っていたならば、私の評判が上がる事も――。残念なことだなあ。〈大鏡〉

今日花見に来なかったならば、明日にはこの桜も――。たとえ消えずに残っていたとしても、花だと思えることができるだろうか、いやできないだろうよ。〈古今・春〉

毎年咲く花の様に、この世が永遠不変であるならば、過ぎ去った昔の日々が――。〈古今・春〉

31 盗人の奴の障子を踏みかけて往にけり。今暫し在ら
ましかば必ず搦めてまし。

搦む 捕まえる まし 反実仮想の助動詞「まし」の終止形。——だ
っただろうに

32 玉の台と求め給はましかば、答へてまし。」と言ふ。

まし 反実仮想の助動詞「まし」の終止形。——だっただろうに

33 汝彼処にて云ましかば、我が肝も亦他の猿の肝も
取りて進りてまし。

進る 「与ふ」の謙讓語。差し上げる まし 反実仮想の助動詞
「まし」の終止形。——だっただろうに

34 組んづ組まれつ、討ちつ討たれつ、敵も御方も隙の
無きこそおもしろけれ。 組んづ 「組みつ」の撥音便

35 僧都乗つては降りつ、降りては乗つつ、あらまし事をぞ
し給ひける。

36 楠が勢之を追い散らさんとする真似をして、追つ
つ返しつ同土軍をぞしたりける。 返す 引き返す

37 (射落とした扇が)白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺ら
れければ、

泥棒の奴がふすまを踏み倒して
逃げていった。やつがもうしば
らくここにいたならば、——。

〈今昔〉

もし、玉の台と言つて人をお探
しになるならば、——。」と言ふ。

〈枕〉

あなたがもし向こうでそう言つ
てくれれば、私の肝も、さらに
他のサルも——。 〈今昔〉

——、敵も味方も油断が無いの
が、感動的であつた。 〈源平盛衰
記〉

俊寛僧都は、船に——、船に乗り
たいというそぶりをなさつた。

〈平家〉

楠木正成の軍勢は、これを追い
散らそうとする真似をして、——
味方同士で戦う振りをした。

〈太平記〉

波の上を漂い、——揺られてい
たので 〈平家〉

38 あさましう慌^{あわ}たたしかりし事^{こと}ども宣^{のたま}ひ出^いだして、

泣^なきぬ笑^{わら}ひぬぞし給^{たま}ひける。

都を出て以来ひどく慌しかった事などを話し出しなさって、――
――なさった。〈平家〉

【練習2】「つ、ぬ」の用法の違いに留意して、空欄にそのどちらかを補え。

1 月出^いで「 」。。

月が出た。〈土佐〉

2 死^しにければ、陣^{ちん}の外^とに引き捨^{ひす}て「 」。。

犬が死んだので、陣の外に引きずって捨てた。〈枕〉

3 「翁^{おきな}年七十に余^{あま}り」 」。。

「じいは年も七十を過ぎました。〈竹取〉

4 米^い、魚^{いを}など乞^こへば、行^{おこな}ひ「 」。。

米や魚を分けてくれるよう頼むと、分けてくれた。〈土佐〉

5 「よき事^{こと}なり。」と承^うけ「 」。。

「それはいいことだ。」と承諾した。〈竹取〉

6 日照^{ひて}りて曇^{くも}り「 」。。

日が照って、その後くもった。〈土佐〉

7 かぐや姫^{ひめのたま}宣^{やう}ふ様に違^{たが}はず、造^{つく}り出^いで「 」。。

かぐや姫がおっしゃった通りに、作り上げた。〈竹取〉